

Background information/pictures available online at:

www.toy-worlds-museum-basle.ch

Media, password: swmb

こんにちは、そしてグリュエッツィ

日本とスイスの150年

2014年4月19日 – 2014年10月5日

日本とスイスの国交樹立150周年記念と両国の親善を祝して、バーゼルのトイワールドミュージアムにおいて特別展示が開催されます。

スイスで記された日本に関する初めての文献は1522年にさかのぼります。1864年に両国間で最初の修好通商条約が結ばれ、活発な経済交流が開始されました。

今回の展示会はベルンにある在スイス日本国大使館の広報文化センターおよびケルンの国際交流基金の協力を得て実現の運びとなりました。

ケルンにある国際交流基金の『日本人形』巡回展示より洗練された現代の人形の数々が紹介されます。日本には独特で伝統的な人形文化があります。その歴史は古く現在まで引き継がれています。展示館を訪れる人々は、昔の人々が感じたように優しく多様な人形の表情に心を奪われ、同時に日本人形の魅力に触れ、日本人形を深く知ることできるでしょう。

現代の陶製品や漆器を含む装飾品の数々によって、長い日本の歴史へ深い興味を抱いていただけることでしょう。作品は古い伝統と現代の流れの両方の特徴を備えています。

日本の茶道で使用される器も有名で、特に名の知れた作家による作品は非常に高価となっています。工芸品も絵画と同じように人々から親しまれていますが、特に限定された芸術形式はありません。

現代日本工芸コレクションは国際交流基金の巡回展示の一部です。会場では映画も上映されますので、日本人形や陶器の制作工程への洞察力をさらに深めていただけたと思います。

日本とスイスの交流と友好

スイスの人々に13世紀のベネチア商人、マルコ・ポーロの書いた見聞録のことはよく知られています。しかし、日本とスイスの交流が初めて文献に示されたのは16世紀、1522年のことです。ザンクト・ガレンの学者であり市長でもあったヨアヒム・フォン・ワットは、古代地理天文学者メラの文献を修正しました。フォン・ワットはライプニヒのピーター・アピアンが記した有名な世界地図に加え、世界地図には日本の群島も含まれ Zipargi と名付けられていました。日本とスイスの交流の歴史は64年後に始まりました。ルツェルンの都市書記、レンヴァルト・ツィザットの『日本諸島実記』が出版されたときです。彼は一度も日本へ行ったことはありませんでしたが、ラテン語、イタリア語、ポルトガル語の手紙や使節の報告を基にこの本が書かれました。ドイツ語圏で初めて漢字が公表されたことに特に注目すべきでしょう。イエズス会の先導で日本の代表団が初めてヨーロッパを訪れた頃で、ヨーロッパの日本への興味が初めて高まったときにこの文献が記されました。

スイス人で初めて日本に上陸したのは、ローザンヌ地方出身の備兵隊長エリー・リボンでした。1623年夏、彼はオランダの東インド会社に仕え長崎とたぶん大阪へも訪れました。この当時日本はヨーロッパの中でオランダとだけ交易があったので、スイスの商品、特に時計と織物がこの会社を通じ日本へ送られました。1854年、いくつかの日本の港が強制的に開放されるとオランダの独占貿易は終結しました。スイス東部の織物工業やヌーシャテルの時計産業はそれを機に、新たな市場開拓を始めました。

しかしながら1859年の初の交渉は不成立に終わり、第二の使節団が1862年日本へ向かいました。徳川幕府との交渉はうまく行ったのですが、成立には至りませんでした。そして任務終了のわずか前、1864年江戸において交渉は成立、日本と初の修好通商条約の調印に至りました。経済交流が活発に開始され、スイスから織物、時計、武器などが輸出され、日本からは特に絹やお茶が輸出されました。

1911年の移住通商条約には、日本の土地購入権利に関する変更も含まれ、21世紀まで両国間の経済交流の基礎となりました。日本におけるスイス人社会も急激に成長し、絹の輸出部門ではスイス人商人たちが重要な役割を果たしていました。1920年代まで日本はスイス時計の重要な輸出国のひとつであり、またスイスの機械工業も日本の迅速な産業化により収益を上げることができました。

1960年代になると、両国の経済交流は新たな成長を遂げました。スイスと日本の企業は色々な分野でお互い競合し、今日、スイス企業は日本国内で重要な投資会社のひとつであり、相互の取引も伸び続けています。両国の国民も国際的なエキシビション、オリンピック、観光客の増加などでますますその繋がりを深めてきました。

商工会議所や産業団体、研究所や大学、都市提携やWTOなど国際機関でのスイス・日本両国の協力などが科学や技術部門での相互的合意への道を、さらには2009年のヨーロッパ初となる日本・スイス自由貿易・経済連携協定（FTEPA）までの道が築かれました。2009年9月1日、日本・スイス自由貿易・経済連携協定（FTEPA）が発効されました。スイスにとってE.C.との協定に続く最も重要な自由貿易協定であります。

現在、スイスからは主に化学医薬品、時計、医療機器などが日本へ輸出され、日本からは自動車、機械装置、貴金属などが輸出されています。相互の利益、友好、お互いの国への関心は今日まで途絶えることはなく、スイスの人々の日本食への関心も深まるばかりです。

日本の人形は崇拜のため、子供向けのおもちゃとして、心を落ち着かせるため、またはこれらすべてのために作られてきました。

ケルンの国際交流基金による『日本人形』の巡回展示では、現代の日本人形制作、そして伝統と今日の日本人の生活の両方に深く根付いた工芸作品をご紹介します。展示会を訪れる人々は、昔の人々が感じたように優しく多様な人形の表情に心を奪われ、同時に日本人形の魅力を知ることでもできるでしょう。

有史以前から世界各地で人形がつくられていました。崇拜は魔術のために作られることもあれば、人間の形をしたおもちゃとして、また芸術作品や娯楽のためにも作られてきました。

日本ほど多くの種類の人形を誇れる国は他には無いでしょう。現在でも大変珍しい姿の人形が作られています。

人形の歴史は遠い昔・・・約24,000年前までさかのぼります。日本で初めて人形が登場したのは縄文時代（10,000-300BC）です。しかし色々な形が登場してきたのは江戸時代(1603-1868)のことです。人形が重要視されるようになり、様々がタイプが作られるようになりました。

江戸時代は平穏で市民の地位も向上してきた時代ではありましたが、災難を防ぐための季節行事が著しく発展しました。陰暦3月3日の女の子の節句、5月5日の端午の節句などもこれに含まれます。

元々は災難を防ぐためでありましたが、人形を飾って楽しむことが人々にとってより重要となってきました。そのため材質が向上し、技術もより精巧になってきたわけです。日本各地で独自の人形が開発されるようになり、今日の多様性を極める人形文化の礎となりました。

日本の人形

日本の人形は多種多様な制作技法を用い、木、紙、布、粘土などで作られています。高度な芸術的技法を用いることで、子供向けのおもちゃに留まらぬ作品も作られています。またビジュアルアートの世界でも確固たる分野を築いています。

御所人形 幼児の人形または宮中（御所）に献上された人形。木彫りの幼児の人形に胡粉（牡蠣の殻を砕いた粉）が何度も塗られ肌の輝きを出し、眉、目、口が描かれています。大きめの頭と白く輝く肌が可愛らしい幼児の姿の象徴であります。

木目込み人形 木製の人形に着物の布が糊付けされています。布の端は木の溝の中に押し込められていて、木目込みという言葉は、人形に着物を装着する技法を指しています。

粘土人形 名前の通り粘土の人形を焼成し様々な色や牡蠣の殻の粉を施した人形。日本各地で作られていますが、色付けの方法はさまざまです。

こけし人形 ろくろ挽きの木製の人形に模様を色付けしたもので、東北地方の民芸品として江戸時代(1603-1868)に登場した歴史的には比較的新しい人形です。こけしは、頭部と筒状の胴体だけで手足の無い独特な形の人形です。

ろくろで作ったこけしは簡単な形と鮮やかな色で知られています。『伝統こけし』と『創作こけし』の2種に大きく分けられています。

『伝統こけし』は郷土芸術に基づき、産地によって系統が異なります。鳴門系、土湯系などさまざまで、それぞれ異なったデザイン、特徴をそなえています。今日、工芸技術は師匠から弟子へと引き継がれています。

『創作こけし』は、作家が自由な発想で作品を仕上げます。第二次大戦後、彫刻、焼成などオリジナル技術を用いて制作されてきました。独特な技法が人々に楽しまれています。

衣裳人形 名前のとおり、染めた布地や織物で作った衣裳を着せた観賞用の人形のことです。デザインも最も豊富で、通常、頭、着物、手足はそれぞれ別の製造者によって作られ、最後にひとつの作品として仕上げられます。衣裳人形は、そのテーマや特別な芸術様式によって展示会に飾られたり、お祝いの行事（桃の節句や端午の節句）用に飾られたりします。

雛人形

日本では3月3日に女の子のいる家では雛祭りのお祝いを行います。この伝統行事は何千年ものあいだ引き継がれ、各家庭に人形が飾られます。男雛と女雛が中心に飾られ、女の子のすこやかな成長を祈ります。

五月人形

3月の雛祭りに対して、男の子のいる家庭では5月5日に端午の節句を祝います。武者人形や、兜飾り、ミニチュア刀などが飾られます。男の子の成長を祝い健康を祈ります。

能人形

能は室町時代(1338-1573)に始まった伝統芸能のひとつです。能の演者は面をかぶり、豪華な着物を身に付けています。この伝統芸能は昔から男性だけが演じてきました。展示会場では能の姿の人形をいくつかご覧いただけます。

名作歌舞伎人形

能と並び歌舞伎も日本の有名な伝統芸能のひとつです。特に有名な役は人形として制作されました。

歌舞伎は江戸時代(1603-1868)から中流市民に親しまれ、歌、踊り、身振りで演じられます。仏教に支配されていた武士の能舞台に比べて、歌舞伎は一般に親しまれた芸術でありました。

市松人形とおさな人形

子供たちがさまざまな場面に登場する姿を人形として表しました。「おさな」という言葉は、小さな子供をさしています。

現代日本の実用的な装飾品

日本では視覚芸術と応用芸術（日常の芸術）との境界線は明瞭ではありません。伝統と革新の価値観にも同じことが言えます。ティーカップが絵画と同じように評価されるように、日本では全ての芸術作品が同等にその価値を評価されるのです。

日本の伝承技術は、伝統に基づいた長い歴史を誇ります。その歴史は紀元前700年までさかのぼり、縄文文化では装飾のほどこされた儀礼用の器が低温焼成で作られていました。中国や韓国からの影響を受け入れながら、独自の芸術作法と融合させてきました。作家達は、伝統を後世まで維持してきてだけでなく、新しい形状や技術を作品に加えていくことにも励んできたのです。

現代になって西洋の生活スタイルや文化が紹介され、日本の工芸は単に伝統や前代から伝わる装飾スタイルを引き継ぐだけではなくなってきました。作家は自分達の作品を通して各々の個性を表現するようになってきたのです。伝統的な取り組み方を作品の基礎とする者もいれば、アールデコなどの新しい欧米のアイデアと合体させる者もいます。自分の作品を日常使用できる物にしようと実用性を強調する作家もいれば、前衛的な姿勢で新たな芸術コンセプトを作品で表現する作家もいます。

第二次世界大戦後、工芸品は交錯しながら発展し、さまざまな方向へと分かれていきました。しかし日本の現代工芸は全く別種のも物であっても、いくつかの共通点から日本の工芸品であると見分けることが可能です。

日本の現代陶製品は、非常に多様で古くからの伝統と現代の影響の両方の特徴を備えています。茶器は特に高く評価され、有名作家の作品は大変高額となっていることがあります。

日本の現代工芸の特徴は以下の通りです：

派手な色（派手な色使い、金や銀）

日本の芸術作品の特徴のひとつは派手な色、金や銀を使用することです。金箔や銀箔を使用したり、金銀の粉を散らしたり、金や銀をはめ込んだり、さまざまな方法で金や銀が施されています。他の金属は基の素材には使用されていません。ほとんどの場合、金や銀が朱、濃い緑、オレンジなど他の色と一緒に使用されユニークで美しい色のコンビネーションを生み出しています。金銀が独自に使用されることもあれば、他の色と組み合わせで使われることもあります。大変派手な色なのですが、金や銀のそのままの強さを見せるのではなく、深みや柔らかみ、優しさを伝えることができます。

侘び

派手な色合いとは対照的に、静寂を表す地味な色合いを使用する“侘び”がもうひとつの日本芸術の特徴です。多くの日本の工芸品は、素材のありのままの性質、質素感を強調することでその魅力を表現しています。例えば、粘土の質感をそのまま残した陶器、木の新鮮さを生かした木工品、錆びてくすんだ色の茶釜、漆のなめらかさを生かした漆器などを挙げることができます。どの場合も、華々しさとは反対の美しさが表現されています。基本的要素には静寂で質素な中間色、柔らかで艶の無い表面、静かで自然な線の組み合わせなどが含まれます。

堅さと新鮮さ（力強い形と色）

日本の工芸品は大正(1912-1926)末期から昭和(1926-1989)初期、1920年代から1950年代にかけて著しい発展を遂げました。現代アートとして確立し、現代へ目を向けたことでヨーロッパの新しい作家の作品が紹介されました。特に、流行のアールデコや構成主義の影響を受け、直線や円を使用した作品が多く作られるようになりました。今日では、幾何学的な線や面を使うだけでなく、力強く鋭い要素を含む自然な構造も好まれています。このような作品は明確な印象を与え、現代的な繊細さをとうとうと表すことができます。作品には明瞭で力強い色合いが使われています。

細部描写（精巧な技）

精巧な細部描写が日本の工芸品の特徴であるとよく言われます。江戸時代(1603-186)にその技術は特に頂点を極めたと言うことですが、当初から日本工芸には精巧な技術が追求されていたのではないのでしょうか。今日でも、複雑な技術が伝統工芸に施されている作品が多く見られます。あらゆる分野の作品に創造的で大変凝ったデザインの装飾が見られます。このような洗練された作品の技術を遂行するには、作家の美的感覚と高い技術が要求されます。

歪み（不均等の美しさ）

日本の工芸品の重要な特色に器などの歪みを挙げるすることができます。丸や四角の形をあえて崩すことで、完璧さの裏に隠れた美しさ、明確な説明のつかない美しさを表そうとしているのです。このような日本の芸術感において美は西洋のように合理的に表現することができないのです。美を表現する歪みは特に茶道の器に見られます。近年は、作家が自己表現のためにもっと一般的に歪みを使用するようになってきています。

花と鳥（花と鳥の装飾）

花や鳥の装飾は古くから工芸に使用されてきました。特に、花や鳥などの自然のアイテムを装飾に使うことは日本や中国では一般的なことでありました。伝統的なモチーフも、その時代ごとの芸術性を反映する傾向があります。現代的な作品には、花や鳥が現代的に表現されています。すなわち概念的なモチーフを使用するよりも、より創造的なデザインとなるわけです。

現代日本工芸の展示は、国際交流基金の巡回展示の一部です。日本の現代工芸のさまざまな作品とその特徴を理解していただくことを目標としています。展示品は、陶器や漆器などの素材、作家、制作された時代などによって分

類されています。もちろん工芸品の美しさと創造性を皆さんに楽しんでもいただけるだけでも嬉しいです。

その他詳細

営業時間

ミュージアム、ショップ、レストラン

毎日 10:00 – 18:00

トイワールドミュージアムバーゼルでは、スイスミュージアムパスおよび Museums-PASS-Musées がご使用いただけます

入場料

CHF 7.00/5.00

16 歳以下のお子さんは大人と一緒に入場の場合無料

特別展示は追加料金なしでご覧いただけます。

全館、車椅子で移動いただけます。

マスコミ関係者の方へ

詳しい情報は以下へお問い合わせください：

Laura Sinanovitch

Managing Director/Curator

Toy Worlds Museum Basle

Spielzeug Welten Museum Basel

Steinenvorstadt 1

CH-4051 Basel

Telephone +41 (0)61 225 95 95

sina@swm-basel.ch

www.toy-worlds-museum-basle.ch

Background information/pictures available online at:

www.toy-worlds-museum-basle.ch

Media, password: swmb